東洋大学学術情報リポジトリ　Toyo University Repository for Academic Resources

ヴェトナム、ニントゥアン省のチャム族のリネージ調査から

著者	中村 理恵
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	49
ページ	182-171
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00007396/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

ヴェトナム、ニントゥアン省のチャム族のリネージ調査から

中　村　理　恵

始めに

拙稿は，2010 年にヴェトナムのニントゥアン省のチャム族の村で行った調査結果をまとめたものである。当初，ヴェトナム南部のメコンデルタのチャムが信奉しているスンニ派のイスラームが，ニントゥアン省の土着化したイスラームであるバニ教信者に，どのような影響を与えているのかを調査するつもりであった。調査に必要な書類を整え，2010 年の５月下旬に，ホーチミン市，南部持続可能な開発研究院（旧南部社会科学院）の研究者と一緒にニントゥアン省に入った。文化情報省は私達の調査を快諾，全面的に協力しましょうと言ってくれた。しかし，調査内容に「宗教」という単語が入っていたがために，宗教省からの許可ももらう必要があるという。そこで，私達は宗教省に出向いた。ところが，宗教省からは色よい返事がもらえない。対応にでた役人はのらりくらりとした返答しかせず，担当の職員は，いつ行っても，いつ電話をしても不在であった。正式な調査ビザ，南部持続可能な開発研究院からの紹介状，ニントゥアン省の文化情報局からの依頼にもかかわらず，宗教省からの承認が得られないことによって，１年前から準備してきた調査は，結局頓挫した。

ヴェトナム政府は，私が想像する以上に「宗教」，特に少数民族の宗教に敏感なのだということが分かったが，何とかしてイスラームの影響について知りたい。宗教に触れずにバニ教徒の間でのイスラームの影響を調べるには，どうすればいいのだろうか。婚姻関係を調査していけば，バニ教徒の間でどれだけイスラームが広まっているかが分かるのではないかと考え，同年９月に親族調査ということで，ニントゥアン省のバニ教徒の住む村で調査をすることができた。婚姻関係を通してイスラームの広まりを調べることが，当初の目的であったのだが，親族関係を調べていくうちに，チャムのコミュニティにおけるリネージが非常に重要な社会的・文化的な組織であるということが見えてきた。９月の調査は１週間という短いもので，リネージ研究の重要性の端緒をつかんだだけに過ぎないが，今後の研究の可能性も含めて調査結果をまとめてみたものが本稿である。

ニントゥアン省のチャムの村

チャム族はヴェトナム政府によって識別された 54 の民族の一つで，人口約 13 万２千人（1999 年の統計），中南部のニントゥアン省，ビントゥアン省，ホーチミン市とその周辺のタイニン省，ドンナイ省，メコンデルタのアンザン省等に住んでいる。チャムは母系制の社会として知られ，結婚後夫が妻方の両親と一緒に住むのが原則である。中南部に住むチャムは，宗教によって土着化したヒンドゥー教を信奉するバラモン教徒と，土着化したイスラームを信奉するバニ教徒の二グループに分けられ，それぞれ異なる村に住んでいる。従来バラモン教徒とバニ教徒の間での婚姻はタブーとされていたが，現在，両者間での婚姻も行われ，特に，バ

ラモン教徒の男性が改宗してバニ教徒の女性と結婚するケースが多くみられる。

イスラームを基礎として民族意識を構築しているメコンデルタのチャムとは異なり，ヴェトナム中南部，ニントゥアン省やビントゥアン省のチャムの民族意識は，東南アジアと中国を結ぶ海洋交易の良好な中継港をもつことによって栄えた，チャンパという歴史的なポリティーに根差している。ニントゥアン省のチャムはチャンパの神々を敬い，自分たちが「チャンパの末裔」,「チャンパの民」なのだと認識している（中村 2001）。

ヴァンランでのリネージ調査

ヴァンランは，県庁所在地のファンラン市から，国道一号線を南へ約 15km 行ったところにある村で，ヴァンランの人民委員会の資料によると，調査当時，約 12,000 人，3,235 世帯が住んでいた。そのうち約 87 % がチャム族で，13 % がキン族（ヴェト族）[1]。ヴァンランに住むチャムはバニ教徒であるが，1950 年代から南部のメコンデルタのスンニ派イスラームが伝えられて，おおよそ 300 の家族がバニ教からスンニ派のイスラームに改宗しており，その数は増加している。ヴァンランにはバニ教徒のターン・キと呼ばれるマスジットと（写真 1 参照），スンニ派のムスリムの大きなドーム状の屋根のあるマスジット（写真 2 参照）の二つがある。

（写真 1 ：ヴァンランのターン・キ　中村理恵撮影）

（写真 2 ：ヴァンランのスンニ派イスラームのマスジット　中村理恵撮影）

ヴァンランのチャムの間のリネージの数は，今回の調査では特定できなかった。インタビューした人たちから得た情報によると，27 ～ 32 という数で，私達が集められたのは，以下の表 1 が示すように 14 である。

（表 1 ：ヴァンランのバニのリネージ）

	リネージの名称	注記
1	Cherit /Korit	「マレーの短刀」，クリスのことのようである。ヴァンランで多いリネージ。
2	Ban Patai Pah Chan	
3	Chiet Klaa	
4	Chiet Proh	
5	Chiet Yang-in	ヴァンランにおける唯一の「山のアタウ」のリネージ。
6	In Atheh	
7	Kroh Gla	４つのモン（サブリネージ）がある。
8	Nai Pat	
9	Patai	ヴァンランで多いリネージ

10	Patai Bah Chang	
11	Po Pat	
12	Po Tam（Po Adam?）	アンニョン村にある，Po Adam という リネージと同じリネージのようであるが，何らかの理由でビントゥアン省のファンリから移住してきたチャムを祖先に持つリネージである。
13	Tani	
14	Thang Birak	「北面の家」という意味で，リジャ・プロンを行わないリネージ。５つのモン（サブリネージ）がある。

一つのリネージが大きくなると「モン」と呼ばれるサブリネージに分けられる。それぞれのモンには，リジャの儀礼のときに使われる「チェッ・アタウ」という儀礼用のバスケットがあり，それを管理保管するリジャ儀礼の女性の踊り手「ムッ・リジャ」の名前で呼ばれることがある。「リジャ儀礼」とは，リニージ単位で行われる一族の繁栄と幸福を祈る儀礼で，様々な種類がある。最大級の儀礼はリジャ・プロンと呼ばれるもので，ドイモイ以前，この儀礼は多くの費用と時間を費やすために「浪費的」ということでほとんど行われなかった。

調査では，バラモン教徒のチャムで，文化情報省の管轄下にある博物館の職員の紹介で，複数の家庭を訪問し，家族構成と婚姻関係について質問した。以下はその結果をまとめたものである。イコールサインは婚姻を意味し，子供のリネージは母親のリネージと同様である。リネージの所に不明とあるのは，インタビュー時に Ego が記憶していなかったということである。

家族 A

Ego （1945 年生，男，農業，以前は医師だった） リネージ：Korit (Cherit)

妻　リネージ：Thang Birak

第１子：女 （医師）＝ 男 （キン族かバラモン教徒のチャム，Ego は長女の夫のことを正確に覚えていなかったが，バニ教徒のチャムではなく，長女との婚姻時にバニ教徒になった）

第２子：女（小商い）＝ 男（ヴァンラン出身）リネージ：Korit (Cherit)

第３子：女（公務員）＝ 男（バニ教徒）リネージ：不明

第４子：男（電話会社勤務） ＝ 女 （ハノイ出身のキン / ヴェト族）

第５子：男（教員） ＝ 女（裁縫）（ヴァンラン出身）リネージ：不明

第６子：女（計理士）＝ 男（ルーンチ出身）リネージ：不明

第７子：男

第８子：女

第９子：男

第 10 子：男

第 11 子：女

家族 B

Ego（1948 年生， 男） リネージ：Thang Birak

妻　リネージ：In Atheh

第１子：男（農業）＝ 女（ヴァンラン出身）リネージ：Thang Birak

第２子：男（農業）＝ 女（フーニュアン出身）リネージ：不明

第３子：女（農業）＝ 男（ヴァンラン出身）リネージ：Yang -in

第４子：男（人民委員会勤務）＝ 女（ヴァンラン出身）リネージ：Thang Birak

第５子：男（獣医）＝女（ヴァンラン出身）リネージ：Korit (Cherit)

第６子：男(自動車会社勤務, ホーチミン市在住)

第７子：男（ホーチミン市で就職）
第８子：女
第９子：男

家族Ｃ　（スンニ派ムスリムの家族）
Ego（男　ヴァンランのマスジットのイマーム）リネージ：Cherit
妻　リネージ：Po Pat
第１子：男(教員)＝女(ヴァンラン出身)リネージ：Chiet Klaa
第２子：女（伝統的な薬の販売）
第３子：男　＝　女（ヴァンラン出身）リネージ：Patai
第４子：男　＝　女（ヴァンラン出身）リネージ：Chiet Klaa
第５子：女
第６子：男　＝　女（ヴァンラン出身）リネージ：Cherit

家族Ｄ
Ego（1935 年生，男）リネージ：Kroh Gla
妻　リネージ：Po Tam
第１子：女　＝　男（ヴァンラン出身）リネージ：Cherit
第２子：男　＝　女（ヴァンラン出身）リネージ：Thang Birak
第３子：男　＝　女（ヴァンラン出身）リネージ：Chiet Yang-in
第４子：女
第５子：女　＝　男（ヴァンラン出身）リネージ：Patai Bah Chang
第６子：男
第７子：男　＝　女（ヴァンラン出身）リネージ：Patai Ba Chang
第８子：女　＝　男（ヴァンラン出身）リネージ：Thang Birak
第９子：女
第 10 子：女

家族Ｅ
Ego‘(1939 年生，女）リネージ：Thang Birak
夫　(1922 年生，旧サイゴン政権下，少数民族省管轄の機関で働いていた。バラモン教徒。)
リネージ：Thanh Amuk
第１子：男
第２子：男　＝　女（ヴァンラン出身）リネージ：Cherit
第３子：女　＝　男（ヴァンラン出身）リネージ：Cherit

家族Ｆ
Ego (男) リネージ：Thang Birak
妻　リネージ：Po Tam (ビントゥアン省のファンリから移住してきたチャムの子孫)
第１子：女（教員）＝　男（医師，ヴァンラン出身）リネージ：Cherit
第２子：女（教員）＝　男（教員，ヴァンラン出身）リネージ：Cherit
第３子：女（教員）
第４子：女
第５子：男　＝　女（ヴァンラン出身）リネージ：Thang Birak
第６子：女（教員）
第７子：男

家族Ｇ
Ego（1942 年生　女）リネージ：Thang Birak
夫　（ヴァンラン出身）リネージ：Cherit
第１子：女　＝　男（ヴァンラン出身）リネージ：Cherit　→ (家族Ｇ－１参照)
第２子：女　＝　男（ヴァンラン出身）リネージ：Cherit
第３子：女　＝　男（ヴァンラン出身）リネージ：Po Tam
第４子：女　＝　男 (バラモン教徒) リネージ：不明
第５子：女　＝　男（ヴァンラン出身）リネー

ジ：Ban Patai Pah Chan
第６子：男　＝　女（ヴァンラン出身）リネージ：不明
第７子：女　＝　男（ヴァンラン出身）リネージ：不明

家族Ｇ－１
母（ヴァンラン出身）リネージ：Thang Birak
父（ヴァンラン出身）リネージ：Cherit
第１子：Ego　＝　男（バラモン教徒）リネージ：Cha dak　→（家族Ｇ－２参照）
第２子：男（織物業）＝　女（バラモン教徒）リネージ：不明
第３子：女（教員）＝　男（バラモン教徒）リネージ：不明
第４子：男

家族Ｇ－２　（バラモン教徒）
母（ミイギィエップ出身）リネージ：Cha Dak
父（ミイギィエップ出身）リネージ：Hamu Pho
第１子：女　＝男（ミイギィエップ出身）リネージ：Hamu Pho
第２子：Ego　＝　女（ヴァンラン出身のバニ教徒）リネージ：Thang Birak
第３子：男（教員）
第４子：女　＝　男（ミイギィエップ出身）リネージ：Hamu Pho
第５子：女（教員）＝　男（ミイギィエップ出身）リネージ：Hamu Pho
第６子：女　＝　男（ミイギィエップ出身）リネージ：Hamu Pho
第７子：男

かつてバラモン教徒とバニ教徒の間での婚姻はタブー視されていた。＜**家族Ｆ**＞の Ego はかつて教員をしており，バラモン教徒の村でも教鞭をとり，若いバラモン教徒の娘と恋に落ちたりしたこともあったそうだが，当時はバラモン教徒の娘と結婚することなど想像すらできなかったという。＜**家族Ｅ**＞の Ego は 1955 年にバラモン教徒の男性と結婚している。異宗教間での婚姻の早い事例であると思われる。Ego の夫のバラモン教徒は，Ego と結婚する以前にバラモン教徒の女性と結婚していたが死別。バニ教徒の Ego との結婚に際して，バニ教には改宗しなかった。

最近，バニ教徒とバラモン教徒の間での婚姻は，それほど珍しいことではなくなってきている。調査に協力してくれたバラモン教徒の博物館職員は，バニ教徒と結婚したバラモン教徒を複数知っており，調査中，そういう家族の家で休ませてもらったり，食事を作ってもらった。＜**家族 G-1**＞はバニ教徒の両親から生まれた子供４人中，３人がバラモン教徒と結婚している。第２子のケース，バニ教徒の男性が，バラモン教徒の女性と結婚しているのは極めて珍しい。異宗教間での婚姻は，バニ教徒の女性とバラモン教徒の男性が多く，結婚に際してバラモン教徒の男性が，妻の宗教に改宗するということが行われる。ところが，バニ教徒の男性がバラモン教徒の女性と結婚した場合，母系制の原則から女性が他の宗教に改宗することはない。したがって，バニ教徒の男性がバラモン教に改宗することになるのだが，これは稀有なことである[2]。今後，このような異宗教間での結婚は増えていくのではないかと思われる。

＜**家族Ｃ**＞はバニ教からスンニ派のイスラームに改宗した Ego の婚姻によって形成された家族である。Ego は以前バニ教の僧侶であり，チャムの伝統習慣などにも詳しい。Ego によれば，イスラームでは同族婚を禁じてはいないが，チャムのムスリムは伝統を重んじるので，同じリネージの人とは結婚せず，結婚後は夫が妻の両親と同居する「妻方居住」を守っているという。Ego は自分の子供たちの結婚相手のリネージを，すらすらと説明することができ，ヴァンランのリネージについて熟知していることが伺えた。ヴァンランのマスジットには，

彼を含めてイマームが４人いるという。一つのマスジットに複数のイマームがいるというのは，メコンデルタのムスリムチャムの間では行われておらず，バニ教の影響かとも思われる[3]。

リニージの知識を持っているスンニ派のムスリムは，＜**家族 C**＞の Ego の世代までのようである。彼はもともとバニ教徒で，その後スンニ派のイスラームに帰依するようになったので，リネージなどの伝統知識があるが，彼の子供の世代になると，リニージの知識を持っている人は減少するようである。ヴァンランのバニ教徒の家でインタビューをしている時に，50 歳代のスンニ派のムスリムの女性がやってきて，会話の輪に加わった。彼女はリネージに関する知識を一切持ち合わせておらず，妻方同居を鉄則とする中南部のチャムのコミュニティにあって，娘ができなかった夫の両親と同居していた。

ヴァンランにおけるバニ教徒と，スンニ派のムスリムの関係は比較的友好的で，宗教の違いに関係なく近所間で行き来しているようである。このような関係は次に見るバニ教徒の村，フックニョンでは見られなかった。

＜**家族 A, B, C, F**＞そして＜**家族 G-2**＞には，子供が父親のリネージの人と結婚したケースがあり，興味深い。＜家族 G-2＞はバラモン教徒の家族であるが，子供７人中４人が父親と同じリネージの人と結婚している。結婚相手を父親のリネージから選ぶ，ということは行われているのだろうか。中南部のチャムの母系制の原則からいえば，父方の従妹とは婚姻可能であるが，「血が近い」ということから従妹婚を避けるようである[4]。しかし家族が経済的に裕福な場合，富の散逸を防ぐために交差従妹婚を行う場合があるようだ。

Thang Birak というリネージは，ヴァンランで大きいリネージであるが，このリネージが行う儀礼は一風変わっている。前述のリジャ・プロンという儀礼には，「リジャ・プロン・アタウ・チョッ（山の神のリジャ・プロン）と「リジャ・プロン・アタウ・タシ（海の神のリジャ・プロン）の２種類があり，それぞれのリネージはこの２種類の儀礼のいずれかを行うように決められている。ところが，Thang Birak というリネージではこの「アタウ」の区別がないのだという。そもそも，リジャ・プロンの儀式そのものを行わないのだという説明もあった。自も Thang Birak のリネージに属している郷土史家の男性は，「北面の家」という意味のこのリネージは，チャンパの北部，アマルヴァティ，ヴィジャヤ，コウタラなどから，南部のパンドゥランガに移民してきた人たちの子孫ではないかという。チャンパの政治形態は，曼荼羅と呼ばれる王国の緩やかな連合体で，チャンパの王は，王の中の王として最も勢いのある地域（曼荼羅）の王が担っていた。チャンパの中心はもともと北部のアマルヴァティ，インドラプーラ，ヴィジャヤにあり，年代とともに移行した。調査を行ったニントゥアン省は，かつてパンドゥランガと呼ばれたチャンパ最南端の地域で，チャンパの最後の勢力範囲であった（重枝 1994:9. 桃木 1999：37-40）。この郷土史家は，自分の祖先は，チャンパのかつての政治の中心であった北部地方から，南部のパンドゥランガに移住して来た人たちなのではないかというのだ。Truong Van Mon の研究によると，リジャ・プロンはマレー半島の現在のケランタン州に伝わる「マッヨン」という儀礼がその起源で，17 世紀頃にマレー半島からパンドゥランガに紹介されたという（Truong Van Mon 2008）。リジャ・プロンがパンドゥランガのチャムの特徴的な儀礼ならば，Thang Birak リネージがこの儀礼を行わないのは，北部から移住してきた人々の子孫だからだ，という説明が可能でもある。

＜**家族 D, F**＞の妻のリネージと＜**家族 G**＞の第３子の結婚相手のリネージは，Po Tam というリネージであるが，これは Po Adam というリネージのことではないかと思われる。Po Adam は同じバニ教徒が住むフックニョン村に存在するリネージであるが，＜家族 F＞

の Ego の説明によると，Po Tam というのは，ビントゥアン省のファンリから，ヴァンランに移住してきた人たちのリネージであるという。フックニョンの Nai Broh Bon Muthi Po Thul Rang というリネージは，ルーンチというバニの村から，フックニョンに移住してきた人たちであるという説明もあった。ファンリに Po Tam というリネージ，ルーンチに Nai Broh Bon Muthi Po Thul Rang というリネージが存在するかどうかについて確認できなかったが，リネージを調査することによって，チャムの歴史的な移住についても知ることができるのではないだろうか。

フックニョンでのリネージ調査

フックニョンは，県庁所在地のファンラン市から，国道一号線を北へ約 12km 行ったところにあるバニ教徒の村で，5973 人，1062 世帯が住んでいる (2008 年ニントゥアン省人民委員会)[5]。ヴァンランにスンニ派のイスラームが伝わった頃にフックニョンにも伝わり，調査当時，107 の家族がスンニ派のイスラームに帰依し，ドーム状の屋根のあるマスジットが，バニ教徒のターン・キとは別に一つあった。

フックニョンのチャムのリネージは，ホーチミン市人文社会科学大学のタンファン教授によって既に調査されているが，ずいぶん前に調査が行われたようで，教授自身正確なリネージの数を記憶していなかった。フックニョンのチャムのリネージの数は特定できなかったが，今回の調査で確認できたのは，以下の表 2 に示した 24 である。

(表 2 ：フックニョンのバニのリネージ)

	リネージの名称	注記
1	Chay Broh Bon Thit	
2	Chay Sah Sang	
3	Chay Suh Chay Sat	
4	Ja Nuun (別名 : Po Bia Thang Hwei)	リジャの儀礼のときに，ギナンという楽器を使用しない。
5	Nai Broh Bon Muthi Po Thuk Glaa Bia Akan	5 つのモン (サブリネージ) がある
6	Nai Broh Bon Muthi Po Thul Rang	ルーンチから移住してきた人たちの子孫という説明。
7	Ong Pacha	
8	Patau Kin	
9	Po Banh Ri	
10	Po Bia Bi Nun	
11	Po Birau	
12	Po Broh Gan Bilow	
13	Po Char Naa Ma Mat	
14	Po Glaa	
15	Po Lom Man	
16	Po Pan Si	
17	Po Rame	
18	Po Taraa	
19	Po Tau Chok	
20	Po Tam (Po Adam?)	
21	Po Thul Rang	
22	Pro Boi Pathi	モン (サブリネージ)3, リジャの儀礼のときに，踊り手，ムッ・リジャ は肉を食べない。
23	Pro Kan Plow (Plwa)	
24	Pro Pathi	

家族 H

Ego (男，フックニョン出身，ムトンという儀礼時にパラニンというタンバリン型の太鼓を演

奏する楽師，病人を治療するシャーマン，グル・ウランでもある。）　リネージ：Nai Broh Bon Muthi Po Thul Rang
妻（フックニョン出身）リネージ：Nai Broh Bon MuthiPo Thuk Glaa Bia Akan
第１子：女(漢方薬の販売)　＝　男(フックニョン出身）リネージ：Chay Suh Chay Sat
第２子：女　＝　男(フックニョン出身)リネージ：Po Rame
第３子：女
第４子：男

家族　I　（スンニ派ムスリム）
Ego（男，ニントゥアン省博物館勤務，フックニョン出身）リネージ：Patau Kin →（家族 I－１参照）
妻（フックニョン出身）リネージ：Ja Nuun
第１子：男（５歳）
第２子：女（２歳）

家族 I－1
父（フックニョン出身）リネージ：Pro Pathi
母（フックニョン出身）　リネージ：Patau Kin
第１子：男
第２子：女　＝　男(フックニョン出身)リネージ：Po Tau Chok
第３子：女
第４子：男
第５子：男　（医師）＝　女（トアティン出身のバニ教徒）（夫婦はファンラン在住）
第６子 Ego：男
第７子：男
第８子：女
第９子：女
第 10 子：男
第 11 子：男
第 12 子：女
第 13 子：女

家族 J
Ego（男 1940 年生，フックニョン出身）　リネージ：Po Rame
妻　リネージ：Pro Boi Pathi
第１子：女（農業）＝　男（フックニョン出身）リネージ：Pro Pathi ？（Ego の推測）
第２子：女(農業と漢方薬販売)＝男(フックニョン出身）リネージ:Pro Pathi ？（Ego の推測）
第３子：男（農業）＝　女（フックニョン出身）リネージ：Po Rame
第４子：女（教員）＝　男（フックニョン出身，伝統医学の医師）リネージ：Pro Kan Plow
第５子：男　＝　女（アンニョン出身）リネージ：不明
第６子：女（教員）＝男（フックニョン出身）リネージ：Po Rame
第７子：男＝女(フックニョン出身)リネージ：Ja Nuun
第８子：男(バニ教の僧侶)＝　女(フックニョン出身）リネージ：Ja Nuun
第９子：男（エンジニア，タイニン省で就職）
第 10 子：女（ホーチミン市で就職）
第 11 子：女（ホーチミン市で就職）
第 12 子：男（ホーチミン市で就職）
第 13 子：男（ホーチミン市で就職）

家族 K
Ego（女　1954 年生）　リネージ：Pro Bon Pathi　→（家族 K-1 参照）
夫　（バニ教の僧侶）リネージ：Ong Pacha
第１子：女　＝　男(フックニョン出身)リネージ：Po Rame
第２子：女　＝　男(フックニョン出身)リネージ：Chay Sah Sang
第３子：男　＝　女(フックニョン出身)リネージ：不明
第４子：女　＝　男(フックニョン出身)リネージ：Chay Sah Sang

第５子：女　＝　男(フックニョン出身)リネージ：Po Rame
第６子：女　＝　男(フックニョン出身)リネージ：Po Pan Si
第７子：女　＝　男(フックニョン出身)リネージ：Po Birau
第８子：男　＝　女(フックニョン出身)リネージ：Po Birau
第９子：男
第 10 子：男
第 11 子：男

家族 K-1
母　リネージ：Pro Bon Pathi
父　リネージ：Po Broh Ban Bilow
第１子：男　＝　女(フックニョン出身)リネージ：Po Rame
第２子：男　＝　女(フックニョン出身)リネージ：Ja Nuun
第３子：女　＝　男(フックニョン出身)リネージ：不明
第４子：Ego　＝　男　(フックニョン出身)リネージ：Ong Pacha
第５子：男　＝　女(フックニョン出身)リネージ：Ja Nuun
第６子：男　＝　女(フックニョン出身)リネージ：Po Taraa
第７子：女　＝　男(フックニョン出身)リネージ：不明
第８子：男　＝　女(フックニョン出身)リネージ：Po Rame
第９子：男　＝　女(フックニョン出身)リネージ：Po Taraa
第 10 子：女＝男(フックニョン出身)リネ―ジ：Ong Pacha

調査日数がヴァンランでの調査よりも少なかったせいか，フックニョンではバラモン教徒との婚姻や，他の地域のバニ教徒との婚姻の例が見られなかった。<**家族 J** >の第７子の男性がアンニョン村出身の女性と結婚しているが，アンニョンはフックニョンに隣接するバニ教徒の村で，もともとフックニョンのバニはアンニョンに住んでいた。アンニョン周辺にキン族（ベト族）の村ができ，キン族の人口が増えたためにフックニョンに移り住ん来たのである。したがってフックニョンとアンニョンには同じリネージが存在する。

<**家族 I** >の Ego は 30 歳代の若い男性で，スンニ派のムスリムであるにもかかわらず，リネージに関する知識を持っている。彼は省の博物館の職員で，チャムの文化について研究している人であり，そういうことからリネージ関する知識を持っていると考えられる。フックニョンのマスジットの長，ハケムはヴァンランの出身で，家族の中でただ一人バニ教からスンニ派イスラームに改宗し，結婚してフックニョンに住むようになった人である。彼は自分のリネージが Gah Brah(おそらく Thang Birak) であることは覚えていたが，父親のリネージも自分の妻のリネージも知らなかった。彼の妻は 1951 年生まれ。両親が彼女がまだ幼かった頃にスンニ派のイスラームに改宗し，ムスリムとして育てられた。彼女はリネージに関する知識を全く持っていなかった。

ムスリムの間でリネージの知識は失われているようであるが，チャムの母系制と妻方同居の原則は守られているようで，ハケムは結婚後ヴァンランからフックニョンに来て妻方の両親と同居している。彼の説明によれば，ムスリムのチャムが離婚した場合，子供は母方に所属するということであった。また，結婚できない相手として，自分の母方の兄弟の子供，すなわち，母方の従妹とは結婚できないという説明があり，同じリネージでは結婚できないという原則がある程度継承されているようである。

フックニョンには Po Rame というリネージがある。Po Rame はチャンパの王であり，バラモン教徒が神として祭っている。<**家族 J** >の Ego の説明によると，バニ教徒の間に Po

Rameというリネージがあるのは，Po Rameの第1夫人がバニ教徒であったからだという。このリネージに属している人は，バニ教の僧侶であっても年に2回はPo Rameを祭る塔に行ってお参りをしなければならないのだという[6]。このリネージには3つのサブリネージがあり，3つの儀礼用のバスケット，チェッ・アタウがあったのだが，1つのチェッ・アタウを管理していた家族が全員スンニ派のイスラームに改宗してしまい，チェッ・アタウを破棄してしまったという。

バラモン教徒のリネージ

今回の調査では，バラモン教徒のリネージについては調査の対象とはしなかったのだが，調査中一日だけ，ブゥウボンというバラモンの村で，共同調査者の学生の家族を訪ねる機会があった。その時に得られた情報を参考までにここにまとめる。この家族のリネージはCha Dakという。バラモンのリネージは，火葬後取り出された遺骨を埋葬する「クッ」という墓の名称で呼ばれる（写真3参照）。本来，クッの名前は神の名前のはずだが，クッが建てられている場所の特徴が名前になるようである。Cha Dakというのはある種の木のことであり，このクッが立てられているところに多く生えているという。家族には6人の子供がいる。結婚しているのは長男だけで，彼はブゥウボン出身の女性と結婚したが，この女性のリネージのクッは，2～3年前に立てられたばかりで，まだ名前がないのだそうだ。クッは立てられた後，儀礼がおこなわれないと正式なクッとして認められ名前をもらえない。長男の妻のクッではまだこの儀礼を行っていないのだ。

（写真3：ミイギィエップ村にあるクッ。中村理恵撮影）

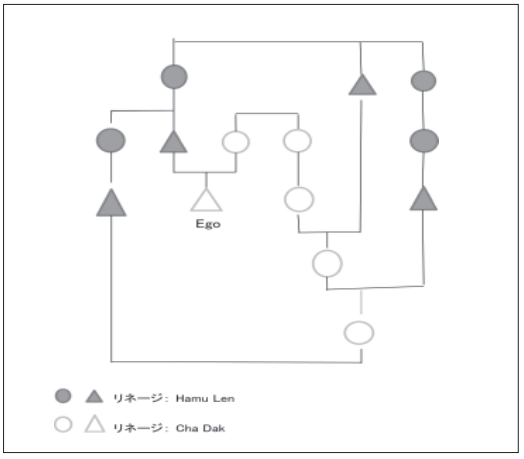
ミイギィエップにもCha Dakというリネージがあると私が指摘すると，「ブゥボンは土地が広い割に人口が少ないので，ミイギィエップやボウチュックなど，他のバラモン教徒の村から移り住んできた家族がいる」という。母方の祖母が移住してきた家族のことを覚えていたので，こういった移住は，40年ぐらい前に起こったことではないかと推測される。名前のないクッがあるということは，ブゥボンにきてまだ日が浅いリネージがあることを示している。

長男（Ego）の話によると，彼の母のリネージ，Cha Dakと父のリネージ，Hamu Leuの間では過去4世代にわたって婚姻関係が結ばれている(図1参照)。

1回目：Egoの両親の結婚　女：Cha Dak ＝ 男：Hamu Leu

2回目：Ego の母方の従妹　女：Cha Dak ＝ Egoの父の母方のオジ：Hamu Leu

3回目：上述2回目の婚姻で生れた女：Cha



（図1: リネージHamu LeuとリネージCha Dakの婚姻関係）

Dak ＝ Ego の父の母方のオバの子供（女）の子供（男）：Hamu Leu

４回目：上述３回目の結婚で生れた女：Ca Dak ＝ Ego の父の姉妹の子供（男）：Hamu Leu

この事例では，リネージ Hamu Leu がリネージ Cha Dak に対して婿を提供するリネージになっており興味深い。これと類似するのが，ヴァンランの家族 G-2 のケースで，子供７人中，４人が父親と同じリネージの男性と結婚しており，父親のリネージ Hamu Pho が母親のリネージ Cha Dak に対して婿を提供している。このように婚姻関係を継続させることによって，二つのリネージの関係を強いものにしているのかもしれない。

終わりに

今回の調査は短期間のものであり，チャムの複雑なリネージのシステムについて一般的なことしか結論として述べられないが，ヴェトナム中南部に住むチャムにとって，リネージは非常に重要な社会組織であると言える。また，複数のチャムの村のリネージを調査することで，チャムの移動，移民の歴史を知ることができ，それによって村の間の関係を知ることができるのではないかと考えられる。

バラモン教徒のリネージは，今回，調査の対象にはならなかったが，集められた二つの事例では，父親のリネージが母親のリネージに対して婿を提供するリネージになっていた。このような婚姻のパターンはバラモン教徒に特徴的なものなのか，今後調査が必要である。

チャムの人達はリネージ毎に儀礼を行い，リネージ毎に決まった神に祈る。リネージにはまた，それぞれにココナッツを食べないなどのタブーがある。儀礼を行い，同じタブーを守ることで，リネージの中の団結が深められるのだろう。同じリネージの人との婚姻の禁止は固く守られており，スンニ派のムスリムの間でも，母方の従妹とは結婚できないというタブーによって守られている。

しかしながら，スンニ派のムスリムとして生まれ育てられたチャムの間では，リネージに関する情報が継承されておらず，リネージ毎に儀礼を行い伝統を継承するということはなくなっている。そういうことから，バニ教徒の間には，「イスラームはチャムの伝統を破壊する」という批判があり，インタビュー中に「イスラームは嫌いだ」とはっきりと言う人もあった。ヴァンランのバニとスンニ派のムスリムの関係は，比較的友好的なようであるが，フックニョンでは，スンニ派のイスラームに改宗してしまった人とは，それが兄弟であっても関係を持たないという険悪なものになっている。ヴァンランのスンニ派イスラームでは，マスジットにイマームが４人もいるなどバニ教を思わせるような要素があるのに対して，フックニョンのイスラームはバニ教に通じるような要素が一切ないというようなことが，二つの村でのバニとイスラームの交流の差に影響しているのかもしれない。スンニ派イスラームに改宗する人は増加しており，バニ教徒の間でのリネージの知識は徐々に失われていくのではないかと考えられる。リネージの知識が失われれば，多くの伝統，儀礼も失われ，チャム社会の組織の仕方も変わっていくであろう。チャムの間でのリネージの知識とチャムの社会変化の関係を，今後考察していく必要がある。

＜注＞

1 ヴァンランのチャムは村をラム・ガ，ラム・チュー（間），ラム・ガッ（外）の三つの地区に分けて呼んでいたが，現在ヴァンラン1，ヴァンラン2，ヴァンラン3，ヴァンラン4と四つの行政区に分割されている。

2 バニ教徒は 15 歳になるまでは正式なバニ教の信者として扱われない。15 歳になってバニ教に帰依するための儀式が行われ，それによってバニ教徒となる。バラモン教徒になるためにはその儀式を取り消す必要があり，私は未だそのような事例について聞いたことがない。

[3] バニ教のマスジットは「ターン・キ」と呼ばれ，それぞれのリネージから最低一人の男性を僧侶としてターン・キに送ることになっている。したがって，ターン・キには，10人以上の僧侶がいる。
[4] メコンデルタのスンニ派のムスリムの間では交差，平行の別なく従妹婚が行われ，伝統的に従妹と結婚することが一般的であった。
[5] フックニョン村は，2008 年にフックニョン 1，フックヴァンランのチャムは村をラム・ガ，ラム・チューニョン 2，フックニョン 3 の三つの行政区に分割された。http://www.chinhphu.vn/portal/page/portal/chinhphu/hethongvanban?class_id=1&mode=detail&document_id=63739
[6] バニ教の僧侶はバラモン教の塔の中には入らない。

＜参考文献＞

桃木至朗
1999　チャンパ：歴史・末裔・建築 東京：めこん
中村理恵
2001「チャンパかアンコールか：チャムのエスニシティーと彼らの歴史認識」ベトナムの社会と文化　第3号 pp.211-223
重枝豊
1994「チャンパ王国の遺跡」チャンパ王国の遺跡と文化 東京：トヨタ財団 pp.9-61
Truong Van Mon
2008 Historical Relations Between Champa and the Malay Peninsula during 17th to 19th century: A Study on Development of Raja Praong Ritual. M. A. Thesis. Department of History Faculty of Arts and Social Sciences University of Malaya.

（客員研究員・マレーシア北方大学客員講師）